

はじめに

理論は有機的な全体としての生命に抽象の刃を加え、それを殺すことによつてはじめて成立する。(福永光司・五木寛之『混沌からの出発』より)

本書のタイトルにある「解剖」は、人間の営みの解釈をめざす人文学のような学問にはそぐわないと感じられるかもしれない。「解剖」は、生きた命を絶つた上での行為だからである。

その一方で、解剖は未来を切り開く営みでもある。解剖を通じて、われわれは生きる有機体の素晴らしさをあらためて感じることが出来る。また、ある者はそこから、有機体に匹敵する、新しい何かを生み出すかもしれない。その意欲をかきたてるのが、解剖であるとも言える。

しかし、切り刻むだけで終わっては、十分ではない。切り刻んだ部分部分に対する観察と記録がおこなわれ、さらにその部分が「何であるか」について説明が尽くされてこそ、解剖が全うされたことになる。

このような解剖の精神にもとづいた能楽の研究として、ただちに想起されるのは、二十世紀後半の能楽研究を牽引してきた横道萬里雄による技法研究であろう。横道は、これまであまり意識されてこなかった能の部分部分を切り出し、その機能を特定し、最適な命名をほどこした。その上で、それらを体系的に分類したことで、よく知られている(『能の構造と技法』ほか)。横道の研究の前には、建築家の山崎楽堂による、能の地拍子を解剖し、命名し、網羅的に分類した研究がある(『地拍子精義』)。また、謡の地拍子の研究に限つていうと、山崎の研究の前にも、おおくの先達による、解剖、記述、分類の試みが存在しているのである(『能の地拍子研究文献目録』参照)。

繰り返すが、解剖とは、部分に分解し、それぞれの部分の機能を特定し、他の部分との関係のあり方を見定める作業である。それは、未来の創造を引き出す営みである。

現代、能楽の研究は、文学や歴史を中心に展開してきた。能のパフォーマンスそのもの研究は、さほど関心が向けられていない領域であるかもしれない。その意味で、パフォーマンスに対して、解剖がおこなわれる余地は、まだまだある。本書の題名に「解剖」の二文字を用いる所以である。

本書の内容を紹介しておこう。

第一部「羽衣を題材に」は、すこし雑多な導入部である。本研究はもともと、能(羽衣)を深く学術的に分析し、その深みから、学校教育や伝承などに生かすことのできる知を導き出し、提供することを目的として出発した。その初志を忘れないために、学校

教育への道筋まで考慮にいられた〈羽衣〉導入を冒頭に置く(二一一)。ついで、〈羽衣〉の文学・歴史を概観する文章を置く(二一二)。つづくふたつは(二一三、二一四)、〈羽衣〉のキリを題材として、謡本の記譜法の進化にふれる。第一部最後は、能楽の解剖のために必要不可欠となる「小段」についての解説である(二一五)。

第二部は、囃子や謡、型などの実技に焦点をあてる。二一から四は、囃子の演奏と記譜について、二一五、六は、謡の演奏と記譜について、それぞれが「何をしているのか」、理解を深めることを目的とする。二一七は、型付の歴史的变化にふれる論考である。二一八、二一九は、本研究の出発点となる〈羽衣〉映像のワキ役、シテ役へのインタビューのまとめである。演技や型付について、演じる側からの考えなどを紹介する。

第三部は、音曲面を中心とする〈羽衣〉の楽譜化が中心となる。能楽ではパート譜は存在するが、すべてのパートを同時に記す総譜はない。ここに、実際の実演にもとづいた総譜を提示する。さらに、その部分部分に注釈を加えた(三一一、三一二、三一三)。三―四は、横書き譜の実践であり、謡の息遣いを記述する、新しい試みである。それぞれの章は、たがいに独立している。興味のあるところから読んでいただきたい。

従来、能楽研究には、音曲や演出に焦点をあてた作品研究が、ほとんど存在しない。音曲や演技を、誰にでも見られるかたちで共有できなかったことが、主な理由だろう。本研究は、インターネット上に公開されている映像、楽譜の作成を出発点として、多方面に展開した研究である。モデルとしているのは、二〇二〇年春、インターネット上に公開された *Noh as Intermedia* である。ぜひ参照されたい。

本書は、紙媒体だけではなく、インターネット上でも公開する予定である。能の中で、それぞれのパートが、それぞれの瞬間に、何をしているのか、どのように共同してひとつの作品をつくりあげるのか。それを知ると、能は、圧倒的な面白さをもって、私たち自身ものになっていく。本書が、その探究のきっかけとなることを願う。

追記 本書では、曲名を示す際、〈羽衣〉のように一重山括弧になっている章と、《羽衣》のように二重山括弧になっている章がある。また、『』などの括弧あり、あるいは括弧なしで言及される章もある。統一するつもりだったが、著者自身の選択にしたがうように方針を変えた。

(藤田隆則 記す)